一途な思いで敦賀発展に取り組んだ大和田荘七

大和田荘七肖像
（『敦賀市史』より）

日本海の重要な港であり、北陸道の要衝でもあった敦賀。その近代化の基盤を築いたといえるのが大和田荘七です。

荘七は、安政4（1857）年、敦賀市相生町の薬屋、山本九郎左衛門の次男として生まれました。子どもの頃から賢く、それが北前船の船荷問屋、初代大和田荘七の目にとまり、22歳で大和田家の養子となります。明治20（1887）年、31歳で襲名すると、近代化が進む時代の波をいち早く察知し、手腕を発揮。日本海沿岸一の大実業家へと成長していくのです。

明治17（1884）年、敦賀・長浜間の鉄道が開通。荘七（当時36歳）は、敦賀の商人に対する便宜と利益のため、明治25（1892）年に大和田銀行を設立します。荘七は、設立の前年、総理大臣兼大蔵大臣であった松方正義と懇談し、敦賀に米穀取引所と銀行を設立する必要性を力説。その際、荘七自身による銀行設立を薦められたのが契機といわれています。荘七は、設立に当たり〝在来の銀行を士族銀行とすれば、大和田銀行は呉服屋形式で親切丁寧、客に敬意を表す〟と語っており、そのとおり〝丁稚銀行〟のあだ名で繁盛しました。

鉄道の開通を機に活況を見た敦賀。しかし、荘七は、鉄道輸送の発展による港の存在意義の低下を懸念します。荘七は、海外に活路を求め、敦賀港が国際的な貿易港として指定されるよう働きかけを開始します。日清戦争の最中に調査員をウラジオストクに派遣。収集した情報を関係者に提供し、指定に備えるよう指導したといいます。明治32（1899）年、その努力が実り、敦賀港は国際貿易港の指定を受けます。しかし、その直後、鉄道の富山延伸により国内航路が不振に陥ります。さらに外国貿易も伸び悩み、国の指定解除の危機に直面。荘七は、自ら貿易会社を設立して牛や大豆を輸入するなど指定維持に尽力しました。

明治45（1912）年、新橋と金ヶ崎（敦賀）間に欧亜国際連絡列車が運行。敦賀は、ウラジオストクからシベリア鉄道を通じてパリまで直結する玄関口となり、荘七の努力は敦賀の発展に結実したのです。

荘七が壮年のころ友人に宛てた手紙には、〝幸運者は真の不運者を助くべく、社会に貢献するのが人の道〟と記載されています。郷土を中心にその想いを一生を通して貫いた、まさに、愛郷に誠を尽くした「敦賀近代化の父」だったのです。

明治42（1909）年の敦賀港
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

関連史料・ゆかりの地

重要文化財 旧大和田銀行本店本館

現在、敦賀市立博物館として利用されている旧大和田銀行の本店建物。地上3階、地下1階の洋風建築で、屋内には大理石も用いられています。当時、北陸では珍しかったエレベーターが設置され、3階の集会場等は市民に開放されていました。

【住所】敦賀市相生町7－8（JR敦賀駅よりぐるっと敦賀周遊バス「博物館通り」下車すぐ）

参考資料等
川村俊彦「二代大和田荘七略伝」『敦賀市立博物館研究紀要』第25号
青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第2集

発行／福井県観光営業部ブランド営業課